

国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書

木片子遺跡・木原古墳

1982.3

島根県益田市教育委員会

発刊にあたって

益田市は、万葉の歌人柿本人麻呂や雪舟ゆかりの地として知られております。古代の遺跡についても史跡スクモ塚古墳、史跡鶴ノ鼻古墳群などをはじめとして数多くあります。

こうした益田市において、昭和49年以来国営総合農地開発事業として益田開拓建設事業が続けられています。

この度、その事業の一環として遠田地区の農地造成事業が計画されました。そして、この計画地域内に所在する本片子遺跡、木原古墳などの調査を益田開拓建設事業所から委託をうけて実施しました。調査の結果、特に本片子遺跡では山陰地方でも調査例の少ない須恵器と瓦を生産した窯跡等を発見し貴重な資料を得ることができました。

本書は、この調査の概要であります。広く各方面にご活用いただければ幸いです。

なお、この調査にあたって、ご指導ご協力いただきました島根県教育委員会、中国四国農政局益田開拓建設事業所、安田公民館、地元関係者各位に対して深く感謝申しあげる次第であります。

昭和57年3月

益田市教育委員会教育長

河 重 貞 利

例 言

- 1 本書は昭和56年度に益田市が農林水産省中国四国農政局益田開拓建設事業所から委託をうけて実施した国営総合農地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要である。
- 2 発掘調査は次のような調査組織で実施した。(敬称略・順不同)
事務局 益田市教育委員会 教育長 河重貞利 社会教育課長 服部悦郎 課長補佐 益成隆人 主事 棕行雄
調査指導 島根大学名誉教授 山本 清 島根大学法文学部 助教授 田中義昭
島根県教育庁文化課 文化財保護主事 片寄義春・勝部昭・石井悠 同主事 卜部古博
島根県埋蔵文化財調査員 杉原清一 島根県立博物館学芸員 村上勇
調査協力 柳浦俊一(八雲立つ風土記の丘)、宍道年弘(奈良大学学生)、房宗寿雄、
小林正人(島根大学学生)、岡崎雄二郎(松江市教育委員会)稲岡正一(安田公民館
長)高橋好市 竹内信枝 塩田秀子 佐々木妙子 中岡茂
- 3 本書の執筆は片寄義春、石井悠の協力をえて房宗寿雄と勝部昭が行った。
- 4 本書の図面の浄書の一部については田根裕美子、小原明美の協力をえた。
- 5 編集は棕行雄と協議しながら勝部昭が行った。
- 6 図面の方位は調査時における磁北を示している。
- 7 島根大学時枝克安先生の御好意により本片子窯跡についての考古地磁気調査報告をのせることができた。記して謝意を表する。

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と周辺の遺跡	2
III 本片子遺跡	5
IV 木原古墳	24
V 金堀1号墳・2号墳	28
VI 本片子遺跡考古地磁気の調査	29

挿 図 目 次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡図	3
図2	遺構配置図	5
図3	竈跡実測図 (竈内出土須恵器実測図) … 6~7	
図4	竈跡焼成室床面拓影	7
図5	土城状遺構と灰原	8
図6	竪立柱建物跡平面図	9
図7	溝状遺構図	10
図8	須恵器・蓋、環実測図	13
図9	須恵器・環実測図	14
図10	須恵器・壺実測図	15
図11	須恵器・壺実測図	16
図12	須恵器・高坏土馬実測図	17
図13	瓦拓影(1)	19
図14	瓦拓影(2)	21
図15	島根県内須恵器竈跡・ 瓦竈跡分布図	22
図16	木原古墳位置図	24
図17	木原古墳測量図	25
図18	木原古墳主体部実測図・ 鉄剣実測図	26
図19	金堀1号墳・2号墳地形測量図	28
図20	試料採取場所	29
図21	シュミットステレオ投影図	30
図22	西南日本地磁気図	30

図 版 目 次

図版1	本片子遺跡	遠景 近景
図版2	本片子遺跡	竈体上面
図版3	本片子遺跡	竈体
図版4	本片子遺跡	焼成室
図版5	本片子遺跡	灰原の瓦・須恵器
図版6	本片子遺跡	土城状遺構 灰原
図版7	本片子遺跡	竪立柱建物跡
図版8	本片子遺跡	溝状遺構
図版9	遺物	須恵器・蓋、環
図版10	遺物	須恵器・環
図版11	遺物	須恵器・壺
図版12	遺物	須恵器・高坏、土馬
図版13	遺物	平瓦
図版14	遺物	瓦 溶着片・丸瓦・隅切瓦
図版15	木原古墳	調査前 発掘中の状況
図版16	木原古墳	調査後主体部の状況
図版17	木原古墳	第1主体
図版18	木原古墳	第2主体

I 調査に至る経緯

昭和49年度から昭和60年度完了を日ざして、国営総合農地開発事業の益田開拓建設事業が開始された。これは約200億円を費やして、高津工区と益田工区の両工区の農地開発造成719ha、区画整理266haを内容とする事業である。

事業対象となる地域の埋蔵文化財保護と事業との調整については、まず埋蔵文化財の分布調査を実施して、分布状況を明らかにすることから始まった。国営事業という大規模な計画であったため、分布調査は県教育委員会社会教育課（現文化課）が中心となって、昭和45年頃に実施した。計画が具体化した昭和48年には、高知県が国庫補助をうけて実施した県下埋蔵文化財分布調査の一環として、高津工区の区域内の踏査を実施した。この時には益田市白上町あたり一帯の計画予定地の踏査に重点をおいた。踏査の結果、予定地内では埋蔵文化財は発見されなかった。計画外で、白上古墳などの現地を確認した。

この昭和48年の分布調査において、益田市遠田町から津田町にかけての一帯では、遠田川の東丘陵を踏査し、大きな前方後円墳を含む大元古墳群や津田町で広範囲に須恵器片の散布する日ヶ迫遺跡等を新しく発見するという成果を挙げた。

その後、昭和53年秋になって益田工区の遠田22団地の計画が具体化したため、益田市教育委員会では担当者の増野潤三、県埋蔵文化財調査員林明子らが県文化課前島己基とともに現地踏査し、木原古墳、金堀1号、2号墳などを発見した。この団地について昭和57年度に農地造成工事が行われることとなり、益田市教育委員会は益田開拓建設事業所と協議した結果、これらの遺跡の事前の調査をすることとなった。益田市教育委員会には埋蔵文化財担当専門職員がいないため急遽県文化課に職員派遣を依頼した。文化課も調査に進んでいる状況であったが事情やむをえず文化課文化財保護主事片寄義春、勝部昭、石井悠らが交互に現地へ赴き調査を進めることとした。この他高松大学考古学研究室田中義昭先生の指導や同研究室の房宗寿雄、小林正人、奈良大学学生穴道年弘、県埋蔵文化財調査員杉原清一、県立博物館村上勇ら各氏の協力を得て実施することとなった。

発掘調査は昭和56年11月から始まり、昭和57年の春まで続いた。調査対象遺跡は当初木原古墳、金堀1号・2号墳の合計古墳3基であったが、開拓団地進入路計画地内に本片子遺跡も該当することとなり発掘調査することとなった。

調査期間中は積雪をみる日もあったが、地元安田公民館長 稲岡正一氏や遠田町高橋好市、佐々木章各氏等関係者の暖かい協力に支えられて無事終了することができた。

Ⅱ 位置と周辺の遺跡

益田市は鳥根県の日本海沿岸沿いの西端の都市である。人口はおよそ5,300人である。日本海岸には砂丘が広がっているが、平地は高津川と益田川の形成する益田平野という沖積地が最も大きく、ここに市街地が営まれている。ここから東側は標高100~200mの丘陵が海岸まで迫り、遠田川、津田川、沖田川などが細長い谷をつくっている。

今回発掘調査対象とした木片子遺跡、木原古墳、金網1号・2号墳は益田市遠田町に所在する。益田の中心市街からは北東方向に直線距離で4~4.8km離れた位置である。

益田市は山陰地方にあっては、気候は温暖で、年間の日照時間も多く瀬戸内型の気候である。山陽側の山口市、岩国市や北九州方面とも短時間で結ばれ、交通の要衝である。

遠田町周辺の遺跡には次のような遺跡が現在のところ知られている。

古墳 大元古墳群は全長約80mの前方後円墳1基、直径10~15m、高さ1~2mの規模を有する円墳6基あまりからなる古墳群である。特に、前方後円墳は原形をよく残した大規模なものである。大元古墳群から南へいった丘陵上には石仏古墳がある。さらに南の丘陵中腹には杜山古墳がある。いずれも小規模な円墳である。

これらの古墳から2.5km北へ離れた、国鉄石見津田駅西方に大道古墳と鶴ノ鼻古墳群^{注1}がある。大道古墳は箱式石棺を内部主体とするもので円墳と考えられる。鶴ノ鼻古墳群は、日本海に突出した小岬に後期古墳が群集する。もとは53基の古墳が営まれていたといわれるが、現在に残るのは31基で、全長30mほどの前方後円墳が2基と他は円墳である。円墳は直径10m内外、高さ2~3mの小規模なものである。内部構造の開口しているものに片袖形の横穴式石室をもつものがある。副葬された遺物には、須恵器、玉類、鉄鏃、単環環頭の大刀などがある。江津市高野山古墳群、旭町やつおもて古墳群^{注2}などとともに石見地方の代表的な群集墳である。

これらの古墳の他、^{注3}『安田村宛展史』^{注4}『益田市史』によるとウエ古墳、前浜古墳、木屋ヶ森古墳、尾堤古墳群などの古墳がある。

遠田町から離れるが益田平野の東側丘陵上には全長100mの前方後円墳であろうと考えられているスクモ塚古墳^{注5}や全長50mの前方後円墳である小丸山古墳などがある。益田平野の縁には横穴墓も営まれており、多数群集するものに北長迫横穴群、片山横穴群^{注6}がある。また現在益田市総合運動公園となっているあたりに四つ塚と呼ぶところがあるが、その付近から三角縁神獣鏡片^{注7}が発見されている。



- 1 本片子遺跡 2 木原古墳 3 金堀1号墳 4 金堀2号墳 5 大元古墳群 6 石仏古墳 7 杜山古墳 8 大進古墳
 9 駒ノ鼻古墳群 10 桑ヶ迫家跡 11 杉辺家跡 12 中塚家跡 13 芝家跡

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡図

集落跡 土器片等を包含する遺跡は、遠田川沿いにいくつか知られている。『島根県遺跡目録』によれば、石斧を出土した靴ノ鼻遺跡、土器片を出土した大山遺跡、二葉遺跡、三百田遺跡、二反田遺跡、神明遺跡、スケ入遺跡などがある。これらの遺跡の丈態となると遺物の表面採集に終わっているのが、明らかでない。また、おそらくは縄文時代に遡るものもあると思われるが、現段階では不明である。

須恵器窯跡 今回調査した本片子遺跡で発見されたような須恵器生産をした窯跡は、本片子遺跡を除いては、下遠田の菜ヶ迫窯跡、杉迫窯跡、西平原町の芝窯跡と中塚窯跡^{注8}が知られている。菜ヶ迫窯跡、杉迫窯跡については丁事中に発見されたと地元の人が伝えているが、詳しいことはわからない。芝窯跡と中塚窯跡については大川清、田中義昭らの発掘調査が実施されており、その研究報告がある。芝窯跡は全長約10.5mの地下式登窯1基であり、中塚窯跡は全長7～8mと推定される登窯1基と窯尻のよく残る登窯1基の合計2基が調査されている。

なお、益田にはすでに指摘されているように屯倉が設置された遺称としての「三宅」の地名が、益田の市街地の東にある。また、遠田周辺は「和名抄」にみえる美濃部^{つたよ}若気郷であり、中世には益田荘の1つとして弥富名とよばれていた。

注1 島根県教育委員会『島根の文化財』第3集 1963

注2 旭町教育委員会『旭町誌』1977

注3 矢富熊一郎『安田村発展史』上巻 1941

注4 矢富熊一郎『益田市史』1963

注5 益田市誌編纂委員会『益田市誌』上巻 1975など

注6 前島己基『益田・北長迫横穴群』（『島根県埋蔵文化財調査報告書』第V集）1974

注7 村上勇氏の教示による

注8 大川清・田中義昭他『島根県益田市西平原窯跡』（『古代』29・30合併号）1958

Ⅲ 本片子遺跡

位置 本片子遺跡は益田市遠田町487、488番地他、土地所有者津田町矢富友彦氏らの山林及び畑地に所在する。安田公民館からは公民館東側の谷を国道9号線から600mほど入ったところにある。ちょうど池がありその東側の西向き丘陵斜面である。丘陵上に立って北側の日本海を望むと、高島が正面に見える位置である。本片子遺跡あたり一帯の付近は、かつて須恵器生産窯跡とみられる染ヶ迫窯跡、杉迫窯跡が発見されたことがあり、山林や畑地内に須恵器片が広範囲に散布している。

調査区の設定 遠田22団地造成地に通ずる進入路新設に伴って本片子遺跡を調査することになったため、調査区の設定は、用地買収された道路敷地内とした。当初本片子遺跡は住居跡など集落跡の遺構が存在するとみられたので、道路敷地予定地内の平坦地にトレンチを設けた。今回遺構の発見された地区より南の谷で現在畑となっている部分やそれよりも南の畑にトレンチを設けたが、須恵器片がいくらか検出されたのみであった。

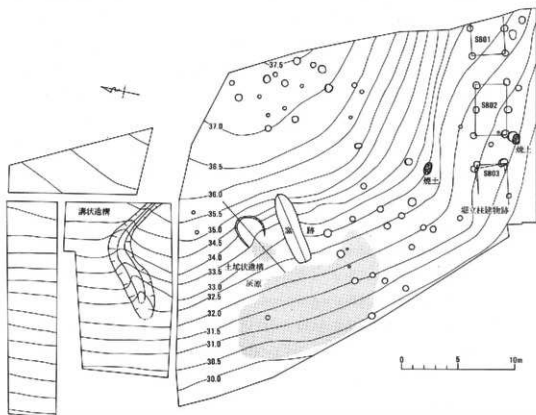


図2 遺構配置図

遺構の検出された地区の状況は、図2遺構配置図のとおりである。調査前までは、南側斜面の平坦面が畑となっていた以外は松林となっていた。調査は5m方眼によりトレンチを設定した。

発見された遺構 発掘調査によって検出された遺構は、窯跡、灰灰、土壇状遺構、堀立柱建物跡、溝状遺構等である。以下それぞれについて説明をすることとする。

窯跡 大川清氏の分類^{注1}によれば地下式無階無段登窯の形式に属するものである。地山をトンネル状にのほり勾配にくりぬいたものであろうと思われる。

西向き丘陵斜面の標高32m～35mの位置に営まれており、焚口と窯尻部分を結ぶ主軸はN-56°-Eを向いている。位置について微地形でみると、丘陵の張り出し部の尾根を北側に見るいくらか凹んだところに築かれている。西側からの風はまともうける状態であるが、冬の調査期間にあって感じたのは、津田の海岸から吹く風は和らぐ場所につくられているということであった。

窯体は焚口、燃焼室、焼成室、煙出しの4部分からなるが、天井部分が崩落している以外は保存状態がよく全体をはばうかがうことができる。規模は、窯体の水平長さ6.34m、斜距離では6.84mある。焚口の床面のレベル高と窯尻の床面のレベル高の差は2.78mである。床の平面形はちょうど舟の甲板のような形をしている。焚口部分の床面幅は1.3m、残存している焚口部分の上側幅は1.5mあり横断面の床面はほぼ水平である。窯体の幅は、焚口から1.7mの地点で1.45m、それから奥に向かっては次第に開き、焚口から4mの地点で1.78mで最大値となる。そして窯尻に向って狭まり焚口から5mの地点で1.7mの幅、焚口から6mの地点で0.9mの幅となる。つまり焚口から1.7mの地点までが燃焼室、それより奥が焼成室であろう。煙出しは窯尻に径50cmほどの円形の灰黒色上の部分が認められたのでそれが当ると考えられる。

窯体横断面の形状はかまぼこ形に近いものであるが、床面は水平でない。床面中央部分は床面と側壁との変換点に比べて5cm、焼成室で5～15cm低くなっている。縦断面における床面の傾斜角度は燃焼室で、4度あり、それから次第に傾斜を増し、焼成室では13度～26度、特に焚口から5.5mの地点から窯尻にかけては45度で急傾斜となっている。この部分では床面に須恵器や瓦の素地を置きやすいようにするための門みが図4に示すようにつくられている。この門みは窯尻のほうほど整然としかもはっきりしたもので、一番奥は5個、その手前は6個、9個……と横にならんでいる。燃焼室に近い方は何度か凹みをつくっているため重複して不明瞭である。門みの大きさは大体に14cm～20cm、深さ3.5～5cmである。床面については土塗りによるかさ上げは見られない。

側壁はいくらか中ふくれする部分が見られる。また、掘削整形した工具痕が弧状にみられる。この弧状の工具痕は幅5cm程で、たてに整形したことを物語っている。土焼りの痕跡はない。

床面及び側壁の色調は、焼成をうけて灰黒色～青灰色を呈する。断ち割ってみると焼成によって窯内側の青灰色ないし黒灰色に変色した層5cmに続いて地山側は5cm程赤褐色に焼けている。窯内につまっていた土の堆積状況は図3の縦断面図、横断面図に示したとおりである。床面から上は焚口、燃烧室部分では炭化物が認められた。そして燃烧室、焼成室では青灰色ブロック混じりの褐色土に青灰色土や赤色土の天井部が崩落していた。

窯内からは床面に接して20～30cm大の栗石が6個あった。このような栗石は下から2層目でもみられた。

窯内からは須恵器片や瓦片、木炭片等が検出されている。瓦片は灰原でも検出されているので、この窯は瓦と須恵器などをいっしょに焼いた瓦陶兼用窯であることを物語っている。この窯に付属した排水溝は認められなかった。

灰原 焼成の終わったもので出来なものを廃棄した灰原は、焚口部分から斜面下方側に、およそ7.5m、横には12.5mの広がりをもつものである。須恵器の高坏、坏、蓋、壺等各種の破片の他瓦、土馬が発見されている。

灰原における堆積状況は、土層図でみると10～20cmの表土下に、炭化物混じりの黒色土、あるいは灰褐色土がありそのさらに下には赤褐色土や赤色ブロック混じりの黒色土などが堆積している。表土下には2～3層の堆積がみられる。それぞれの層の厚さは10cmほどで

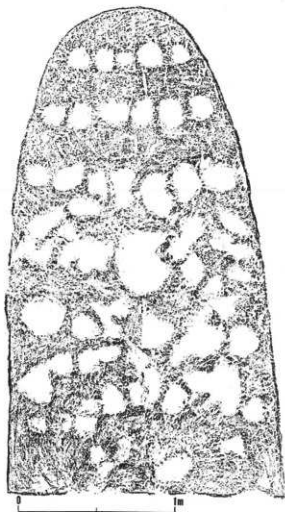


図4 窯跡焼成室床面拓影

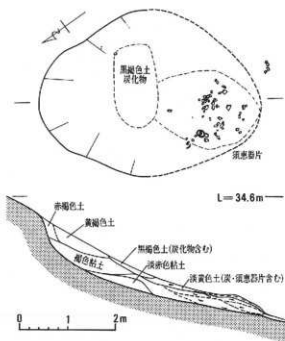


図5 土塚状遺構と灰原

この灰原で出土した須恵器は、坏、壺片などである。この土塚状遺構の土層は表土（10～15cm）について黄褐色土、淡黄色土、褐色粘土などとなっている。この付近の地山はきれいな黄色粘土となっていた。なお、この土塚状遺構の下方斜面においてきれいな黄色粘土の層が3～5cm堆積しているのがみられた。このような点から粘土を採掘したあとが土塚状となり、その前面に窯から出した不出来なものをおいた灰原が形成されたものと考えられることも可能であろう。

堀立柱建物跡 調査区内では窯跡の上部側の丘陵頂部、窯跡の南側斜面、丘陵南斜面の平坦地の部分において柱穴が検出されている。このうち丘陵頂部のものは柱穴跡の直径70cmのものと直径30cmのものがある。調査範囲がせまくまとはまりはない。窯跡南側斜面のものも柱穴跡の大きさが直径70cm、直径30cmなどのものである。一部には焼土をとまなう小土塚もある。柱穴跡が多数あり、堀立柱建物がいくつかあったことを示唆している。ただこれらの柱穴は地山面を平坦に加工して作ったものではなく、丘陵斜面そのままに掘りこまれている点が注意される。

丘陵南斜面の平坦地で発見された堀立柱建物跡は規模がほぼ判るものである。調査前の段階では標高31m～32mあたりの部分に幅8mの細長い畑が東西方向に作られていた。畑

ある。しかし、このような堆積のみられる範囲は焚口の方に近い灰原の部分である。斜面下方部分では、須恵器片などの堆積があるが、土層のうえで変化は認められなかった。

土塚状遺構と灰原 窯跡の北側に土塚状遺構が検出されている。斜面を掘り込んで作ったもので平面形は長円形をし、その規模は3.5m×4.6m、深さ50～60cmのものである。

この土塚状遺構の低い側には須恵器片が炭化物に混じって3層程度堆積している。この須恵器片の堆積は灰原とみられ、今回の調査区内で1基の窯跡が検出されているので、それと関係あるとみられる。

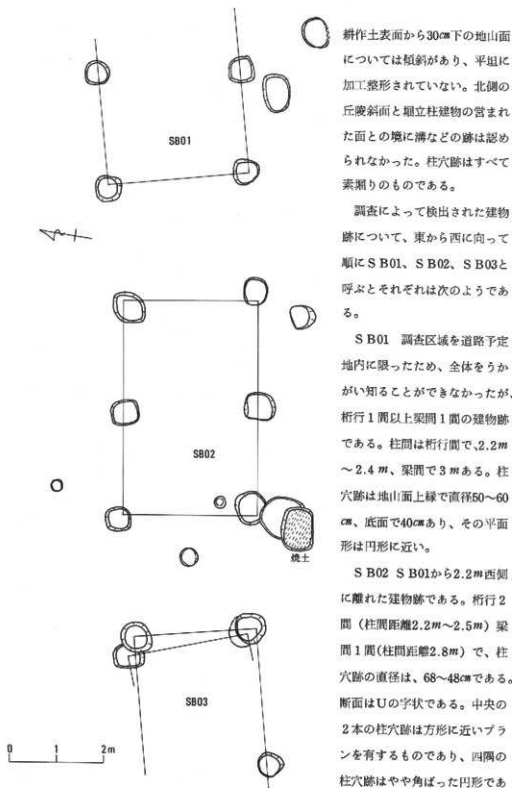


図6 堀立柱建物跡平面図

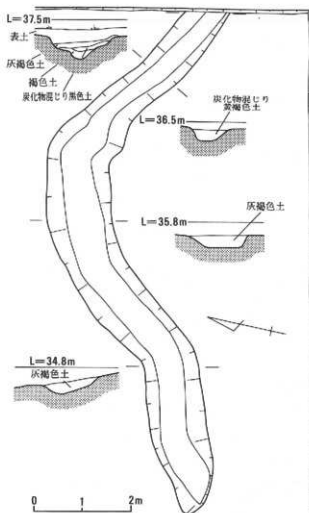


図7 溝状遺構図

かの建物が建っていたと考えることができる。

溝状遺構 竈跡から北側へ14m離れたところで検出されたもので、丘陵頂部から丘陵西側斜面を下方側に向かって伸びるものである。長さは検出した部分で12m、幅は広い部分で上幅130cm、下幅75cmあり狭い部分で上幅75cm、下幅28cmある。地山面からの深さは30～45cm、表土面からの深さは60cmある。断面は逆梯形形状を呈する。

この遺構は、丘陵の低い側に立って上から見た場合、上方から左に折れて途中で右に折れさらに下方に向かっていくらか右に折れて終わるという蛇行したものである。

この遺構からは床面についた状態で、須恵器小片が少量であるが出土している。このことから判断すると竈跡に関係する一連の遺構の1つであろう。

重複して、径90cmほどの小土城と、88×72cmの長円形プランの焼土跡が認められた。これらは切り合い関係から柱穴が古く小土城、焼土跡の順で新しくなる。

S B03 部分的に検出したのみであるが、桁行1間以上(柱間距離2.9m)梁間1間(柱間距離2.6m)の建物跡で、ほぼS B01と並行する建物跡である。柱穴跡の直径は地山上縁で60cm、床面で40～50cmある。

この建物跡の東側の柱穴跡部分において柱穴に重なりがあり、建てかえられたことを示している。つまりS B03は建てかえられたものである。

S B01～S B03の建物跡はいずれも南面する東西棟である。

これらの建物跡以外に、柱穴跡がいくつか散見されるので、以前にはこの平坦面が南に伸びておりいくつ

出土遺物(図8~14、図版9~14)

今回本片子遺跡の調査で検出された土器類の総点数は7224点にのぼった。それらは須恵器、瓦、上馬、陶磁器類に大別できるが、陶磁器は確実に窯廃絶以降のものであり、遺構には伴わず、また、何れも断片的な破片であるためその内容には触れないこととする。

須恵器 須恵器の器種は、蓋、坏、壺、高坏の4種類があり、その他のものは確認されなかった。またこれらはさらに蓋が大きく分けて4類に、坏が5類に、壺が4類に、高坏が3類に分けられると考えられるが、それら個々の器形、調整の概略について以下に説明する。

蓋 蓋A類(図8-1~5、18~21) 輪状のつまみをもつもので、口縁端部は下方へ屈曲し、丸い端部へと続く。調整は内面中央部付近にヨコ方向のなでを施し、他の部分はすべて回転なでを施している。

蓋B類(図8-22) 輪状つまみをもった蓋A類に形状が似ているものであるが、つまみは粘土塊を皿状に整形したもので、上面が少し凹んだものである。天井部には凹線があり、口縁部は下方に曲がり、その端部は丸みをもつ。

蓋C類(図8-6~16) 宝珠状のつまみをもつものである。器形は扁平ながら丸みをもっており、口縁端部も丸い。内面中央部付近にヨコ方向のなでを施し、他の部分すべてには回転なでを施す。つまみについては整った宝珠状のものではなく、簡略化したもので、丸みを帯び、乳頭状や断面が弧状となるボタン状をしているものなどがある。

蓋D類(図8-17) かなり大きな円盤状のつまみをもつもので、つまみ以外の部分の形態は不明である。残存部の調整には全て回転なでが見られる。

坏 坏A類(図8-23~33) 中央に一条の溝をもつ短い高台がつくものである。体部は高台の部分あたりからやや上向きになり、すぐに上方へ屈曲し丸い端部へと続く。器高はさして高いものではなく、唯一器高の判った例(33)では2.3cmにすぎない。調整は坏部内面底部周辺にヨコ方向のなでを施し、他の部分には回転なでを施す。底面は回転へラおこしの後に回転なでを施している。

坏B類(図9-1~28) かなり高くふんばる高台と深い坏部をもつものである。坏体部は曲線的に広がり、端部付近では軽く外方に反っている。脚部は内面に突帯をもつもの、端部が下方へ軽く突出するもの、直線的に伸びるもの等いくつかのバリエーションをもち、大まかには6種類程に分けられると考えられる。しかし、坏B類のすべてを合理的に区分すべき指標は見あらず、個体差が大きいためここでは一括して示しておくこととした。調整は坏部内底面によこ方向のなでが入るほかはすべて回転なでを施している。

坏C類(図9-29) 高台のつかないもので、器形が箱形に近いかなり深さのあるものである。端部はやや尖り気味に軽く外反している。内底面にはヨコ方向のなでを、底面にヘラ削りを施すほかはすべて回転なでを施している。

坏D類(図9-30、31) 短く細い高台をもつもので、坏部の形態は不明である。坏内底面にはよこ方向のなでを施し、他は回転なでである。底面は回転ヘラおこしの後、回転なでを施すものである。

坏E類(図9-32) 坏D類と似た手法による高台がつくものであるが、高台の大きいもので、坏を逆きにしたような形である。回転なでを施すものである。

壺 壺A類(図10-2~8 図11-6、8) 比較的頸の短いもので、口縁は単純に軽く外方に広がり、丸い端部をもつものである。口縁部の調整はすべて回転なでを施すが、胴部内面には青海波がくっきりと残り、外面は叩き目を回転系の調整で消している。壺A類中にはさらにいくつかのバラエティを示しているが、ここでは一応一括して示しておく。

壺B類(図10-1、9、図11-5) 口縁部が肥厚し、平面をなすものである。口縁外面には回転なでを施し、内面にはカキ目が見られる。胴部内面には青海波が認められ、外面には叩きの後にカキ目を施している。

壺C類(図11-2、7) 口縁の単純に伸びる比較的長頸のものである。調整は確認できる限りすべて回転なでを施している。これもやはりいくつかのバラエティを示すが、一括して示しておく。

壺D類(図11-1) 小型の短頸壺で、やや扁平な丸い胴部をもつものである。確認できる調整はすべて回転なでである。

壺は他に肩部以下のもの(図11-3、4)、底部周辺のみのも(図11-9、10)などがあるが、口縁の部分との対応関係は明らかにできない。調整は、図11-4の壺のように内面に青海波、外面に叩きの後カキ目を施し、図10-9のように外面を叩きの後回転なでを消す以外はすべて回転なでである。

高坏 高坏A類(図12-1~15) やや低く大きく広がる脚をもち、端部が軽く下方へ突出している。坏部は丸くやや浅めでかなり広がっている。調整は坏部内面中央周辺にヨコ方向のなでを施す以外はすべて回転なでである。

高坏B類(図12-16) 脚部の長いもので、2条の丸く浅いがくっきりとした凹線をもち、脚部下半と坏部は不明で、確認できる調整はすべて回転なでである。

高坏C類(図12-17) 脚に透しをもち、端部が下方へ丸く軽く突出するものである。透しの形、坏部については不明である。確認された調整はすべて回転なでである。

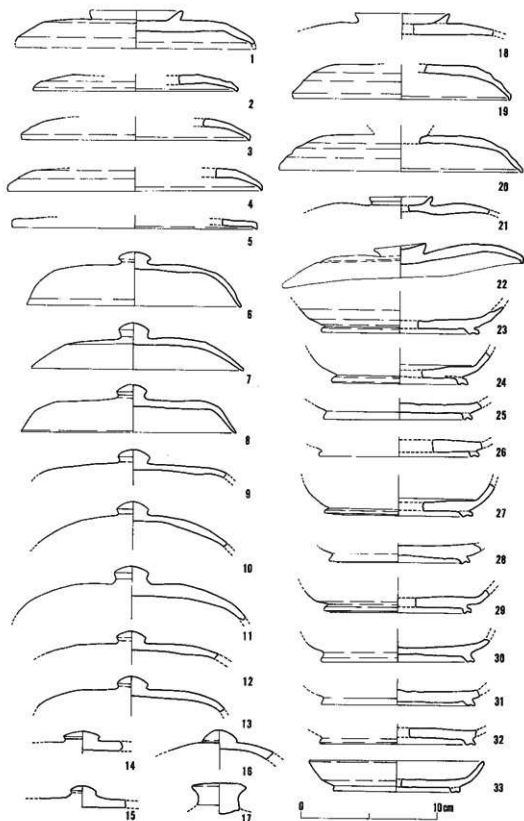


图8 须惠器·盖、环实例图

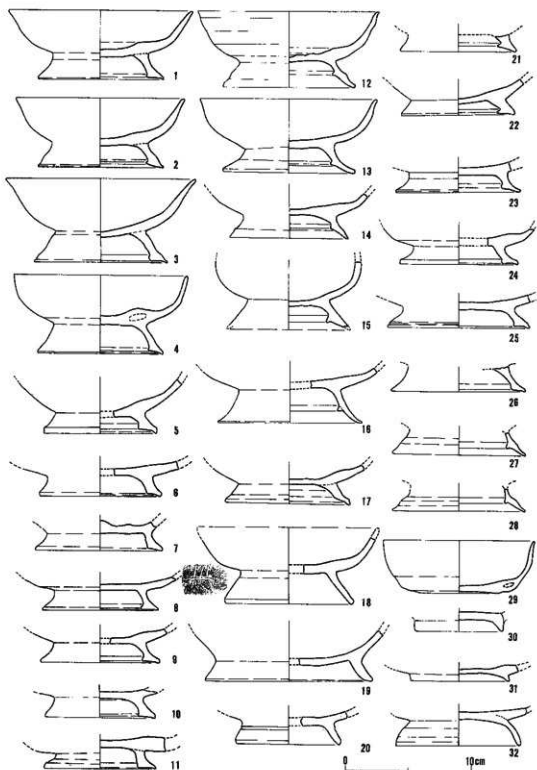


图9 须惠器·环实剖面图

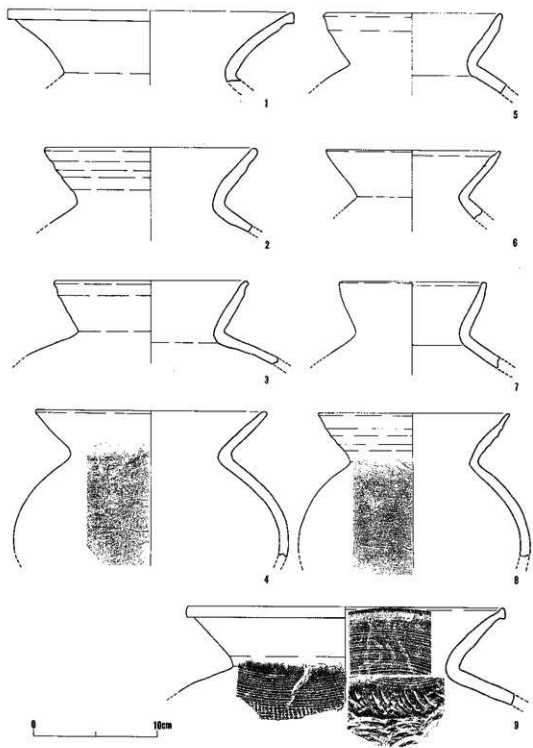


图10 须器器·盗突测网

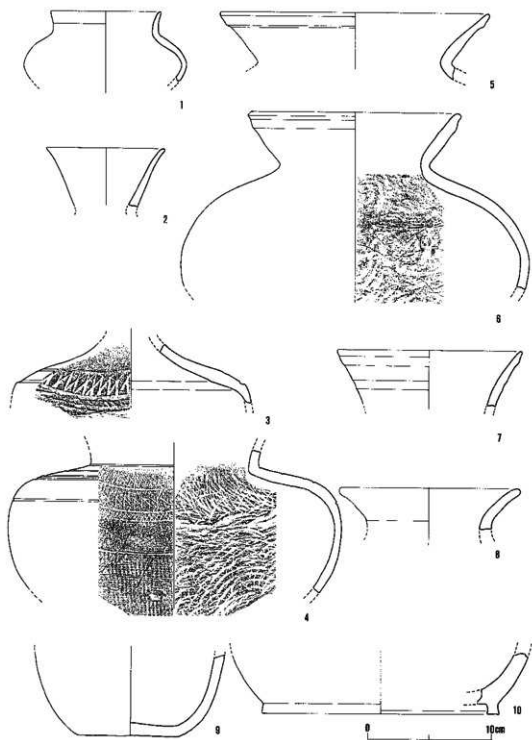


图11 须惠器·钵类测图

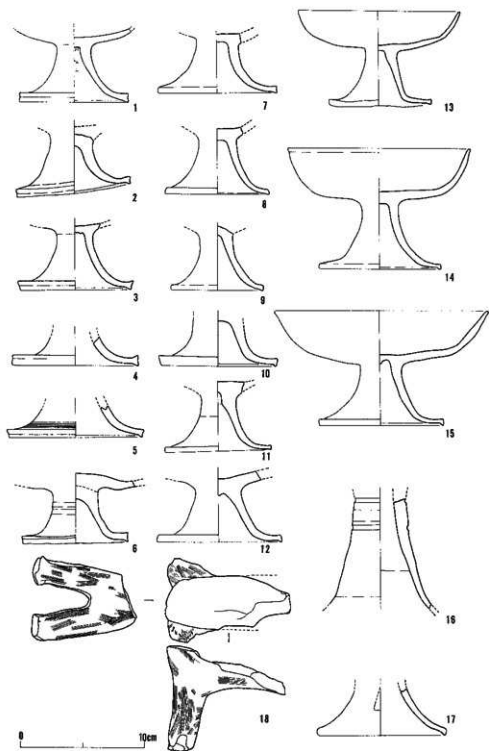


图12 须惠器·高环、土馬实测区

須恵器片のなかには溶着したもの、重ね焼きの痕跡のあるもの、緑褐色や緑色の自然釉のかかるものなどがある。

土馬 図12—18。須恵質のもので、前脚と胴部の一部分のみが残存していた。脚の長さ4.5cm、径2.3cm、胴部径4.3cmを測ることができる。調整は全面指圧と指なでである。

瓦 窯内と灰原から検出されており、平瓦、丸瓦、隅切瓦の3種がある。

瓦窯内と灰原から検出されており、平瓦、丸瓦、隅切瓦の3種がある。合計40点の破片があり、完形品は1点もない。窯内からは2点、灰原からは38点出土している。軒平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、垂木先瓦、堤瓦などの瓦は見当らない。

平瓦 (図13—1～7、図14—1～4、8) 今回検出された破片の多くは平瓦である。全体の大きさをうかがうことのできるものではなく、10cm内外の破片が多い。

窯内の燃焼室部分で発見された平瓦片の一つは厚さ2.6cmあり、桶巻き造りによって作ったものである。凹面は一部分に細かな布目痕があり、凸面にはたて削りがある。側面はへらによる2面取り、端面もへら切りである。焼成は須恵質で、ざらざらした砂粒が多く付着している。胎上は2mm前後の長石粒を含んでいる。灰色を呈する。

灰原で発見された平瓦片は厚さは厚いもので2.5cm、薄いもので1.5cmある。桶巻き作りによって作ったもので、横骨に巻きつけたあとが残るものがみられる。また、凹面は粘土を板状に糸切りしたあとが残っている。この糸切り痕を木片でたて方向にすり消しているもの(図13—6)もある。桶巻きの際の布目痕については、荒いものと細かいものがみられる。凸面は叩きのあとであるいは木片による削りがみられる。側面、端面のわかるものはへらによる面取りがされている。なかには端面を指頭によって整えているものもある。胎上には長石、石英の小粒を含むものが多い。焼成は概してよい。

平瓦で最も大きな破片は(図13—7)たて21cm、横18.7cm、厚さ2.6cmのものである。これは桶巻き作りによったもので、糸切りによって粘土板を作ったのち、凹面は模竹に巻きつける際に粘土を圧延した重ね合わせの状況をよく示しているものである。凸面はなでによる調整をしている。布目の大きさは細かいものである。側面はへらで2面の面取りをしている。端面はへらによって中央から上と下の方向へ2回削っている。

平瓦片の中には明らかに焼き台として使用されたものがあり、破断面に緑色や黒褐色などの自然釉がかかったり、須恵器坏片などの付着しているものがある。

丸瓦 (図14—5、6) 2点ある。5は11.5cm×13cm、厚さ1.5cmの破片である。側面は1面の面取りをしている。凸面は削り調整かと思われる。凹面は糸切り痕とやや荒い布目痕がついている。焼成はやや軟かい。6は9cm×10cm、厚さ2.1cmの破片である。凸面

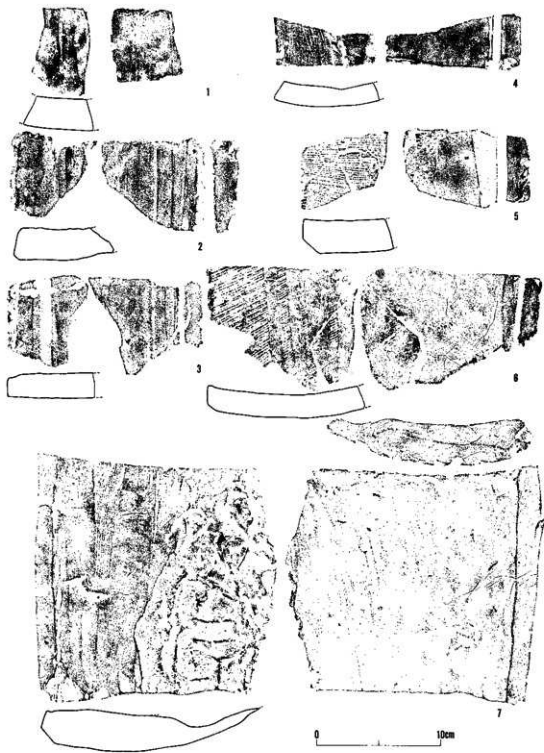


图13 瓦拓影 (1)

はなでによる調整かと思われ、凹面は糸切り痕が明瞭に残っている。焼成はやや軟かい。

隅切瓦 (図14—7、9) 2点ある。7は8.4cm×9.5cmの破片で、凹面は横骨の幅2.2～2.9cmあり、調整は不明である。凸面は削り調整とみられる。小長石粒を多く含むもので、焼成はやや軟かく灰褐色を呈する。9は17cm×9cmの破片である。桶巻き作りによるもので、凹面は糸切りしたあとやや荒い布目痕がついている。側面と隅切側の端面は2面を面取りしている。側縁から1.2cmのところ凹みがある。凸面はおそらく叩きのあと全面を刷毛目によって調整をしている。またこの面には指痕もある。焼成はやや軟かく、淡黄褐色を呈する。

発掘調査によって本片子遺跡からは以上のような遺物が出土したが、その出土地別の破片数は下表に示す通りである。なお、この表では産物のタイプ分けは行っていない。

まとめ

本片子遺跡について記した内容のまとめをいくつかしておきたい。

遺構の性格 調査した範囲で検出した遺構は窯跡1基、それに付随する灰原上土状遺構1、溝状遺構1、堀立柱建物跡3棟以上、柱穴跡群等である。窯跡は1基のみであったが、天井部が崩落していたものの全体の様子をほぼ知ることができた。形式は半地下式の可能性も残るがスサなどの混入がなく一応地下式無段無階登窯とみておきたい。焼成室から窯尻部分の床面に凹みがある点は珍らしいと思われる。また、この窯は先に触れたように窯内と灰原から瓦片が出土しており、須恵器と同時に焼かれた瓦筒兼用窯であったことを示している。つまり、窯内から出土した瓦が2片、また他の須恵器と接合しているものや、灰原の層をなしている部分でも瓦が独立的に2個体分検出されていることもあり、実際に窯内で焼かれたものである。窯は使用時に崩落していない。

土状遺構は土を採取した跡とみられ、溝状遺構は窯の外をめぐるとみられなくもない。堀立柱建物跡は南斜面の平坦面にみられるように1周×2周という小規模なものが並列にあらんであったが、粘土塊等はなかったものの工人たちの住居あるいは工房であった可能性があろう。窯に覆屋があったか

本片子遺跡出土遺物数量表

出土地	窯内	灰原等	計
須恵器			
蓋 A	12	68	80
蓋 B	1	133	136
蓋 C	0	1	1
蓋 D	0	2	2
坯 A	11	30	41
坯 B	0	130	130
坯 C	0	6	6
坯 D	1	1	2
坯 E	1	1	2
坯 類	3	377	380
土 類	0	147	147
土 類	11	4099	4110
土 類	3	94	97
土 類	7	2004	2011
瓦			
平瓦	2	34	36
丸瓦	0	2	2
隅切瓦	0	2	2
土 類	0	1	1
合計			7186

この他陶器片38点が出土している。

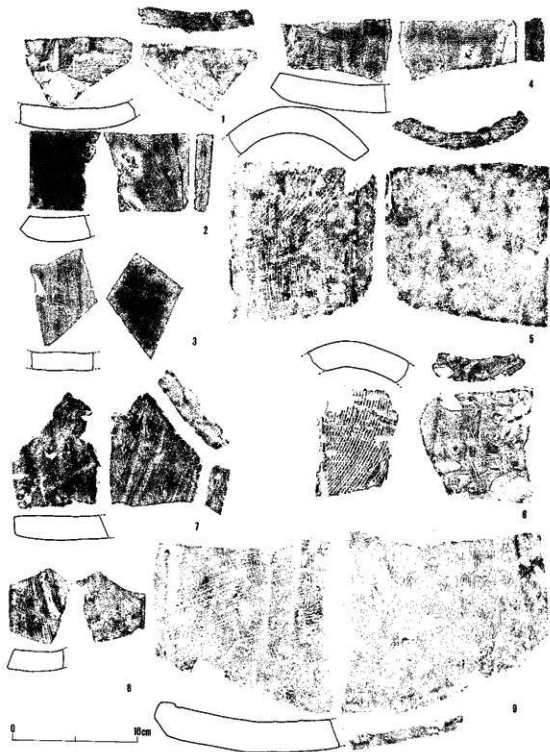


图14 瓦 新 影 (a)

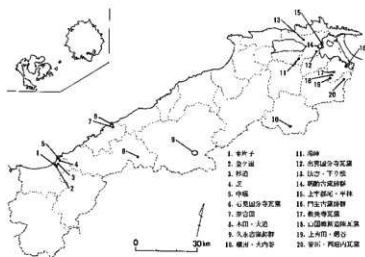


図15 徳島県内須恵器窯跡・瓦窯跡分布図

広い範囲に須恵器が散在しているので、まだ窯跡が存在する可能性は強いと思われる。

窯跡の稼働期間 灰原の広がりや灰原の堆積状況からみると堆積層は薄く、短かい期間と思われる。これは一基の存在でもありさして長期にわたる操業を考えるのは困難であると判断されるからである。

遺物のうえで、窯内から出土した破片では坏A類と蓋A類が特に目につく。窯内は須恵器焼成後窯出しを行い清掃されたものと思われ残存遺物は少ない。逆に坏B類、蓋胴部がほとんど見られないことから本片子窯跡の最後の窯入れ時には坏A類、蓋A類が中心に焼かれたものと思われる。

しかし、例えば坏A類と坏B類とが時期差をもっているものと連断はできない。つまり前述のように窯の長期にわたる操業を考えるのは困難であって、出土資料にはっきりとした時期差の指標を見出すことはできない。ここでは本片子窯跡出土遺物をとりあえず一時期の資料と考えておくこととする。ただし、このことは今後検討する必要がある。

須恵器編年の位置 本片子遺跡から出土した多くの須恵器について、器種別にいくつかの分類を行った。このうち坏B類はあまり類例をみないものである。現在のところ比較的近似したものが、益田市北長迫横穴群から出土しているにすぎない。この種の須恵器はあるいは益田市周辺にのみ分布するものかもしれない。同じように坏E類、蓋D類などについても石見地方の他地域、山口県方面にも今のところ類例を見ないものようである。逆にいえば形態や技法上特色をもったものということができると思う。

本片子遺跡出土の須恵器の時期については、石見地方の須恵器編年が未だ試みられていないため具体的に論じることはできない。しかし、少くとも横穴墓の使用されている期間

どうかかわらないが、灰原で柱穴が見つかったので注意する必要があるだろう。

調査した地点の近くには瓦陶生産に必要な粘土や水を供給するのに必要ないつかの池がみられ、しかもかつて近くで染ヶ追窯跡や杉迫窯跡が発見され、

に併行するものであることは、北長迫横穴群中から出土しているもの^{注2}の例から指摘することができる。また、北長迫横穴群からはかえりをもつ蓋も出土していることから、それらの須恵器から極端に時期的に降るものではないと思われる。地域差をとりあえず無視して出雲地方の須恵器編年と比較すれば、これらの須恵器は柳浦編年^{注3}式におおむね対応するものと考えられる。これは前述の点と矛盾するものではないと思われる。

本片子窯跡出土須恵器と益田市西平原町で調査された芝・中塚両窯跡^{注4}出土の須恵器を比較すると後者には蓋坏に高台や輪状ないし宝珠状つまみはみられず、明らかに本片子窯跡出土のものよりも古い様相をもつものといえる。本片子窯跡は西平原の芝・中塚両窯跡よりも時期的に降るものである。

瓦の生産 これまで石見地方で瓦を葺いた古代寺院跡は、浜田の下府廃寺跡、石見国分寺跡、石見国分尼寺跡、大田の天王平廃寺跡、旭町の重富廃寺跡が知られている。そして、瓦窯跡については石見国分寺瓦窯跡の発掘調査がされている。今回本片子窯跡で須恵器とともに瓦が生産されていたことより新たに益田市周辺に古代の寺院跡の存在を指摘することも可能であろう。遠田の大元1号墳という大前方後円墳の存在、鷲ノ鼻古墳群、北長迫横穴群の存在、「三宅」の地名などからこれまでも益田市周辺には相当有力な勢力があり豪族の氏寺があったことは想定できたが、瓦陶兼用窯の発見はよりその契機を示したことになると思われる。

瓦自体についていえば、本片子窯跡出土の瓦には凸面に斜格子目の叩き痕や縄目のそれはみられず、木片による削りや刷毛目調整があるのが特徴である。これは須恵器を作る手法と同じであり、製作工人の技術に関心もたれる。

また、瓦は須恵器編年上の位置に照らせば島根県内でも古い部類に入る可能性がある。

なお、参考までに第15図に島根県内の須恵器窯跡・瓦窯跡の分布図を示しておく。

今後の課題 調査体制が十分でなく、かつ大量の遺物を限られた時間で整理したため不十分な作業のまま報告者を作成したことは残念であった。今後の課題としては、第1に益田市西平原の芝・中塚両窯跡を合わせた石見地方西部の須恵器生産状況の把握と、貫した地域に根ざした須恵器編年の作成を試みる必要がある。第二に本片子窯跡から出土した瓦にまつわる問題の解明を図る必要がある。その他、出土遺物そのものや遺構の検討、炭の樹種鑑定、胎土分析等も必要である。今後、遠田周辺の開発には注意が必要である。

注1 大川清『かわらの史』1966

注2 前島己基「益田・北長迫横穴群」（『島根県埋蔵文化財調査報告書』第V集）1974

注3 柳浦俊一「出雲における歴史時代須恵器の編年試論」（『松江考古』第3号）1980

注4 近く田中義昭「益田市西平原窯跡群の意義について」（ふいーど・のーと№3）が刊行される予定

Ⅳ 木原古墳

位置 木原古墳は益田市遠田町3576一7番地の山林に所在し、遠田町1293番地の伏谷啓義氏の所有地である。

遠田川をつくる幅200~300mの細長い平地の中程、中遠田に位置し、国道9号線からは東へ500m入ったところの低丘陵上にある。日本海岸からは、1500m入ったところである。

伏谷啓義氏宅からは山道を160m上ったところの標高70mの丘陵上にある。



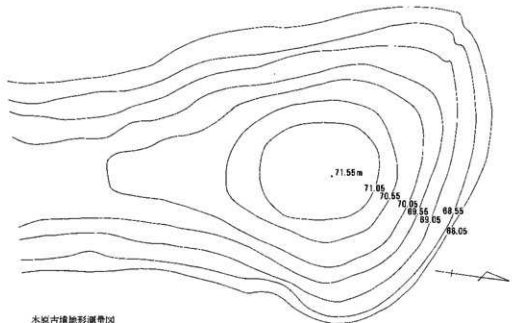
図16 木原古墳位置図

古墳 直径14~15m、高さ1.8~2.2mを刻る円墳である。地山をいくらか整形し、20~30cmの盛土をしている。平面プランは整然とした円形ではなく、丘陵の自然地形をそのまま利用している。墳丘に埴輪や葺石は認められなかったが、墳丘の南裾にあたる丘陵の屋根上の部分に栗石大の川原石が置かれていた。古墳に関係するものかどうかは不明である。

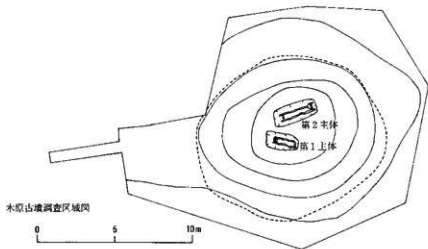
遺骸を納めた内部主体は墳頂部に2カ所検出された。いずれも箱式石棺である。墳頂部の東側で検出された主体部を第1主体、西側で検出されたものを第2主体と呼ぶこととする。それぞれの状況は次のようである。

第1主体 地表面下25cmのところで検出された。箱式石棺をおいた掘り方は南北長3.5m、東西幅1.1m、北辺長2m、南辺長1.8mある。箱式石棺の蓋石は9枚用いており、大きめの石5枚で石棺をおおい、その上に蓋石と蓋石の間をおおう石を4枚用いている。蓋石の大きさは大きいもので、長さ65cm、幅40cm、厚さ15cmある。埋葬した遺骸の頭の側の部分即ち、南側に、より大きな蓋石が用いられていた。蓋石は上面の多くの部分が粘土で目貼りされている。

箱式石棺の内法規模は長さ140cm、幅は南側では30cm、北側では27cm、深さは20cmある。石材の組み合わせ方法は仕切石を側石ではさむというやり方であるが、北西隅の部分のみは側石を仕切石ではさんでいる。用いられた石材は厚さの整ったものではない。相欠けつきはみられない。



木原古墳地形測量図



木原古墳調査区域図

図17 木原古墳測量図

箱式石棺内の南端には、長さ26cm、幅12cm、厚さ6cmの扁平な石が置かれていた。これは枕石と考えられる。

棺内においては副葬品は検出されなかったが、一面に小礫が敷かれていた。床面は中央部分が低くなっており、頭部と足の方と考えられる部分が少し高くしつらえられているという状態であった。

第2主体 第1主体の中央部からは西側に1.5m離れて営まれた箱式石棺である。第1主体の中軸線と第2主体の中軸線との角度は31度傾いている。

地表面下25cmのところ検出された第2主体の掘り方は、概ね南北長3.4m、東西幅1.6

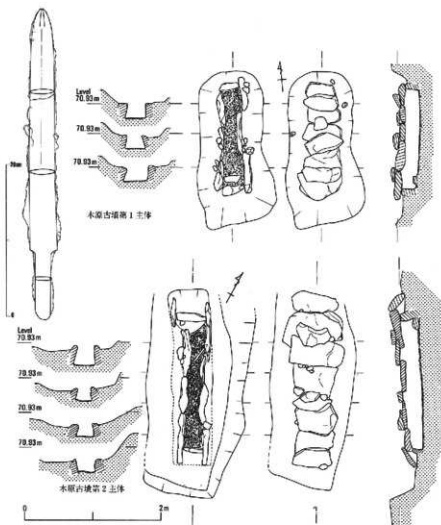


図18 木原古墳主体部実測図・鉄剣実測図

70cmで、第1主体よりも大きい。箱式石棺の蓋石は合計10枚用いられていた。蓋石の大きさは大きいもので、長さ86cm、幅40cm、厚さ10cmある。蓋石は第1主体と同じように大きいものを下においているが、第1主体のようにつめてならべずに間をあけて4枚置きならば、その上に2枚は間をおおように置きあるいは下の蓋石に重ねるように置いている。北側と南側には斜めに立てかけておさえとしている。頭部の位置と思われる北側の方により大きな蓋石が用いられている。

蓋石の上面は、ほぼ全体を粘土で目貼りし、そのうえ石棺内の状況から遺骸の胸部の部分と思われる位置の蓋石上には粘土の上層に小円礫がほぼザルに2杯分ぐらい認められた。

このような小円礫は第1主体ではみられなかったものである。

箱式石棺の石材は第1主体と同質のもので、仕切石を側石ではさむものである。そして仕切石の位置は側石の端ではなく、北側では20cm、南側では18cm内側に位置していた。石棺の内法は長さ182cm、幅は北側で45cm、南側で28cm、深さ20~28cmある。側石は4枚ずつを用いて作られていた。側石の上面が内向きに150度程度傾斜していたが、これは倒れたものと理解される。

床面には、第1主体の床面に敷きならべられた小円礫よりも大きめの扁平な円礫が全面にならべられていた。

棺内の北側端には扁平な長さ50cm、幅30cm、厚さ10cmの石があり、これは枕石と考えられる。枕の位置は第1主体と第2主体は逆位置で、遺骸が逆向きに埋葬されたことを示している。

副葬品は鉄剣が1口、石棺内から検出された。北側の仕切石から55cm南側に寄った位置に、切先を北に、茎を南にして、しかも、石棺の主軸に対して40度傾いて納められていた。

この鉄剣は全面錆でおおわれているが、保存は良好で、全長41cm、剣身32cm、茎9cmである。剣身の断面形状は扁平な菱形で、背の部分で厚さ0.7cmある。なお、切先から9.5cmあたりでいくらか折れ曲っている。埋葬の際に曲げたものと解される。^{H1}

現在、この古墳は蓋石をもとの位置にもどして埋められている。

木原古墳からは土器や埴輪等は発見されておらず、築造時期の推定は古墳の築造法、主体部、鉄剣から判断するより他ないであろう。

古墳は盛土の少ない自然丘をいくらか整形したにすぎないもの、主体部は箱式石棺を2基おき、それは丁寧な組み合わせをしていること、副葬品は鉄剣以外にはないことに特徴がある。

石見県地方で箱式石棺を内部主体とする古墳には、益田市津田町大道古墳、石見県中山古墳群、^{H2}瑞穂町順庵原1号墳、^{H3}御郡山墳墓等を挙げることができる。

このような例を参考に、鉄剣の副葬されている点を考慮すると古墳時代後期にまで降るものではないと考えられる。

注1 折れ曲った鉄剣の県内出土例は松江市政古町月廻古墳等に例がある。

注2 三宅博士「中山古墳群の発掘」(『季刊文化財』第28号) 1977

注3 吉川正「古代史」(『瑞穂町誌』第3集) 1976

V 金堀1号墳・2号墳

金堀1号墳は益田市遠田町3575-3番地、沢江次郎氏所有の山林に所在する。金堀2号墳は遠田町3576-21番地、島田玉野氏所有の山林に所在する。

いずれの古墳も、すでに農地造成されたところの北側に隣接する位置の丘陵上にあるものである。

分布調査の段階で、1・2号墳ともに直径15m、高さ1m程度の円墳とされていたものである。発掘調査は、墳丘に幅60cmのトレンチを十字形にいった。その結果、表土が流失し、かつ原形を損っていることが判明した。遺物や遺構は検出されなかった。このため、発掘調査は、トレンチの段階でとどめることとした。

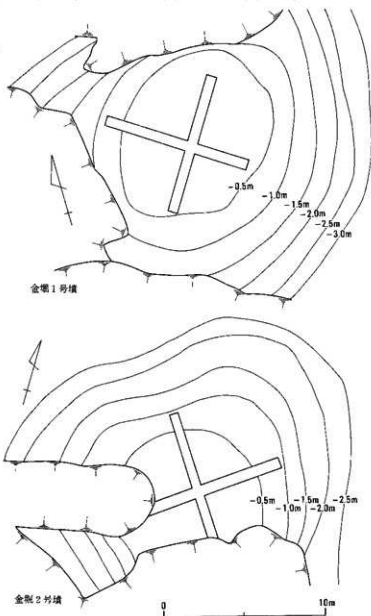


図19 金堀1号墳・2号墳地形測量図

VI 本片子遺跡考古地磁気の調査

鳥根大学理学部 伊藤晴明 時枝克安 井口 悟

本片子遺跡の一基の登窯から16個の定方位焼土試料を採取し、熱残留磁気の方向を測定した。そして、残留磁気の平均方向と西南日本における地磁気永年変化曲線とを比較することによって、この古窯跡の最終焼成年代を推定した。

(1) 窯および試料

この窯は、長さが約6.4m、幅が約1.5mの登窯であり、長軸をNE50°に沿い、全体を南西に傾けて構築されている。試料は、焼土を石膏で固め、その方位を磁気コンパスで測定することにより、窯奥の急勾配(約30度)の床から10個、緩い勾配をもつ床からトレンチに沿って6個、計16個の定方位試料を採取した。窯と試料採取場所の略図を図-1に示す。

(2) 測定結果

試料は一辺約3cmの立方体に整形し、残留磁気の方向を無定位磁力計で測定した。測定された残留磁気の方向を図-2のシュミットステレオ投影図に示す。残留磁気の方向は分散が少なくまとまりが良いのがわかる。これらの方向から計算された平均伏角 (I_m)、平均偏角 (D_m)、フィッシャーの信頼度係数 (K)、フィッシャーの95%誤差角 (α_{95})、および計算に使用された試料の個数 (N) は次のようになる。

$$I_m = 53.4^\circ$$

$$D_m = -13.8^\circ$$

$$K = 532$$

$$\alpha_{95} = 1.60^\circ$$

$$N = 16$$

(3) 年代推定

図-3に、本片子遺跡登窯の残留磁気の平均方向とともに、広岡(1977)による西南日本の地磁気永年変化曲線を示す。残留磁気の平均方向は十印で、誤差の

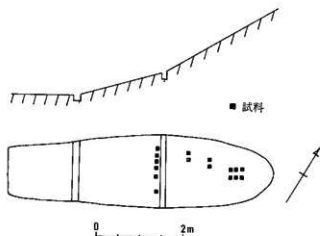


図20 試料採取場所

範囲は点線の楕円で示されている。窯の考古地磁気推定年代を知るには、地磁気永年変化曲線の上で、平均方向に最も近い点をまとめ、この点の時代を眺めとれば良い。同様にして、点線の楕円から、年代誤差を見積ることができる。このようにして求めた形式的な推定年代は次のようになる。

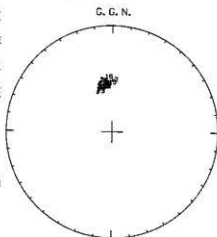
A. D. 750±20

A. D. 590±20

これらの二つの年代値から、一つの正しい年代値を決定するためには、他の分野からの証拠を必要とする。

参考文献

広岡公夫『第四紀研究』
15 (1977), 200p. -
203p.



N. R. M. MEASUREMENTS

SAMPLE	INCL.	DECL.
1	1	56.50
2	2	54.00
3	3	56.00
4	4	58.00
5	5	56.00
6	6	55.00
7	7	54.50
8	8	55.50
9	9	54.00
10	10	54.50
11	11	55.00
12	12	56.50
13	13	55.00
14	14	52.00
15	15	52.50
16	16	47.50

図21 シュミットステレオ投影図

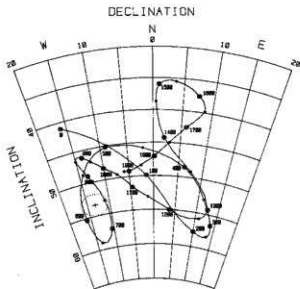


図22 西南日本地磁気図

圖 版



遠景 (西から望む)



近景 (南から望む)

図版2 本片子遺跡



窠体上面土層



窠体上面と灰原



窯体のトレンチ状況

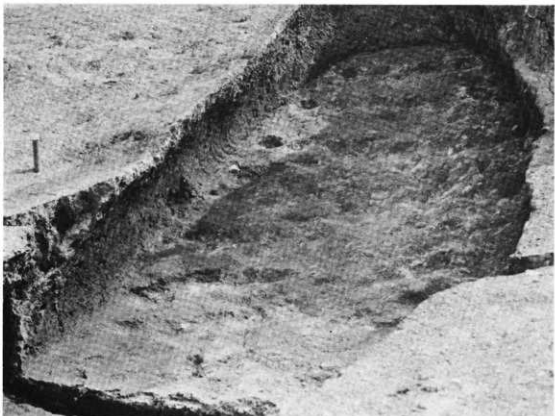


窯体全景

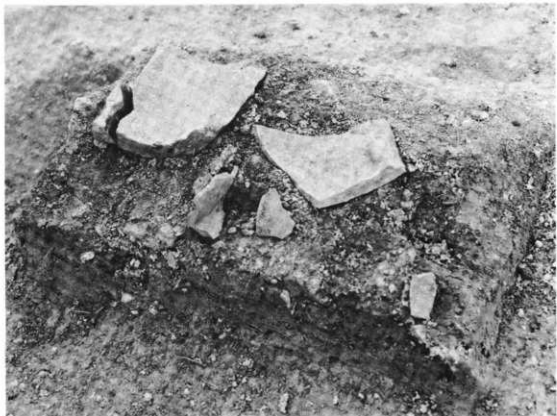
図版4 本片子遺跡



焼成室内の土層



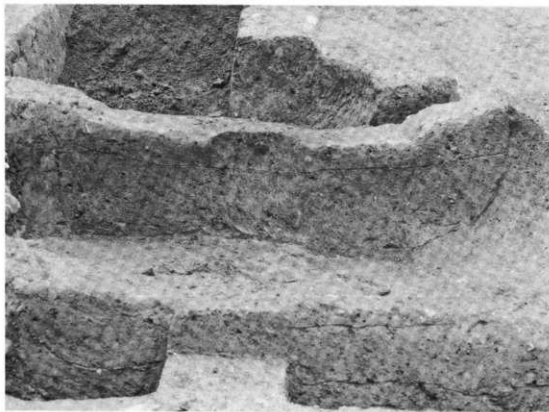
焼成室壁面と床面の状況



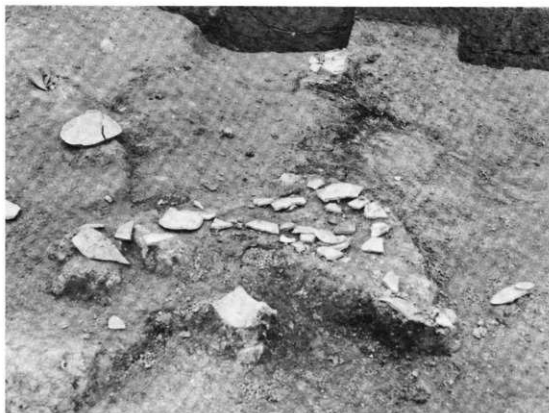
灰原の瓦出土状況



灰原の須恵器出土状況



窯体北側の土壇状遺構



窯体北側の灰原

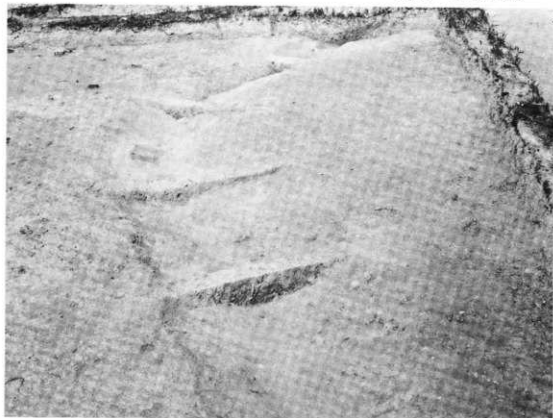
図版7 本片子遺跡



丘陵頂上部の柱穴跡



南斜面平坦地の竪立柱建物跡

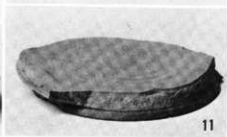
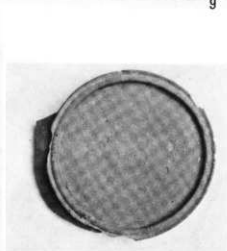
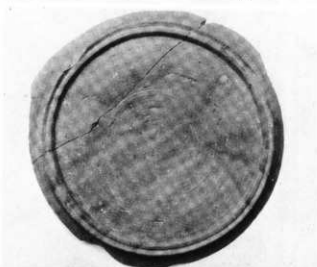


溝状遺構（西から）

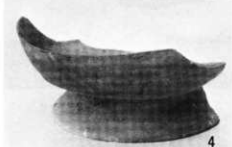
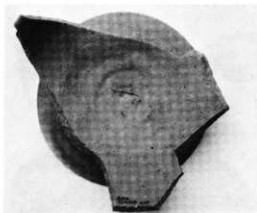
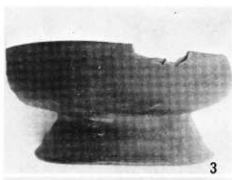


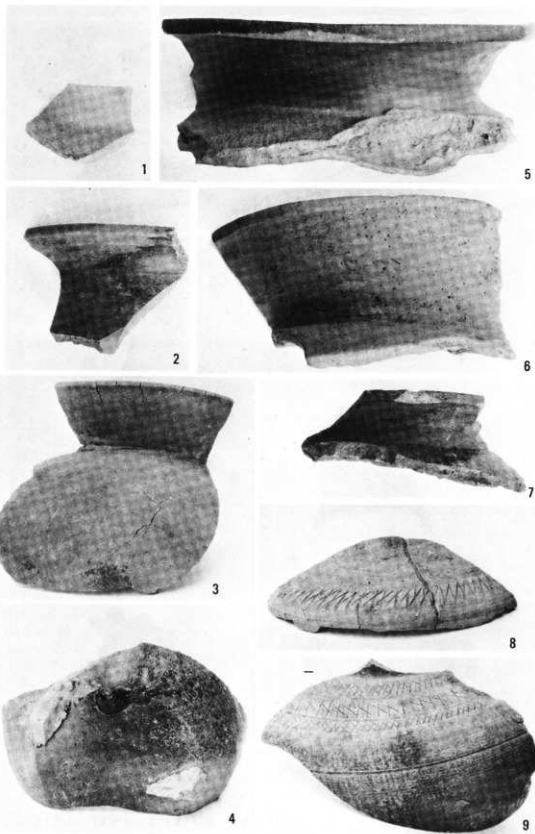
溝状遺構上端断面の土層

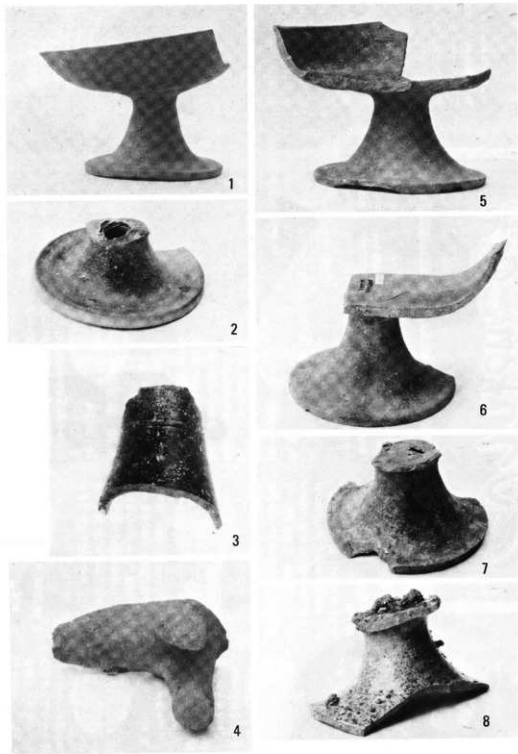
图版9 本片子遺跡遺物



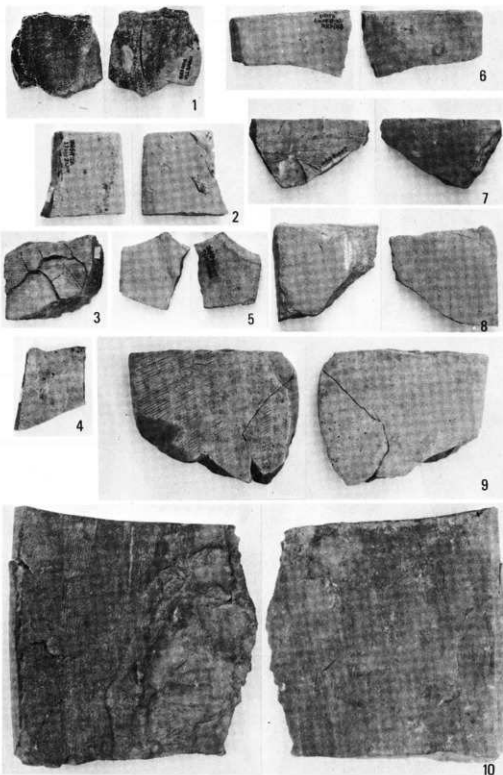
須惠器 蓋(1~9) 环(10, 11)

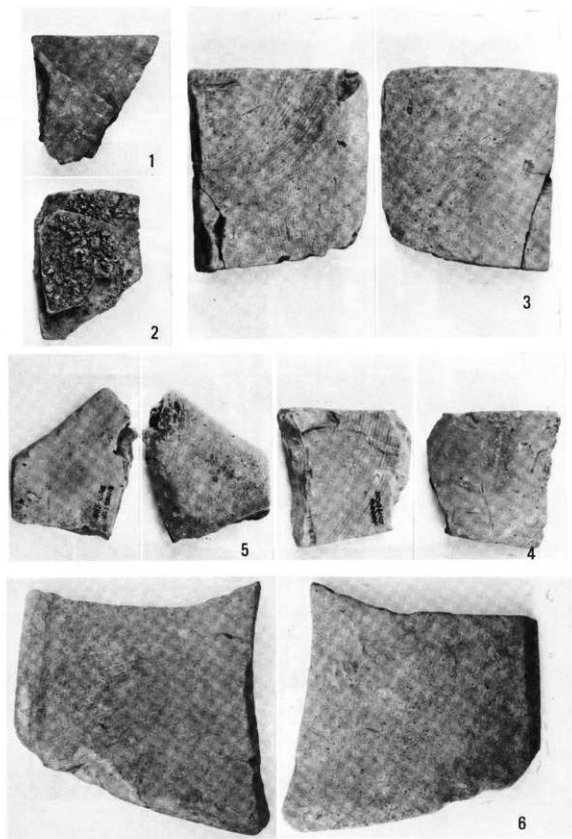






須恵器・高坏(1~3, 5~8) 土馬(4)





瓦 須惠器溶着片(1, 2) 丸瓦(3, 4) 隅切瓦(5, 6)



調査前の状況（南から）



発掘中の状況（南から）



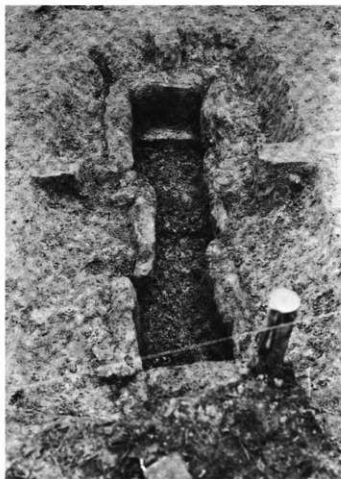
発掘調査後の状況



主体部検出状況 (右第1主体
左第2主体)



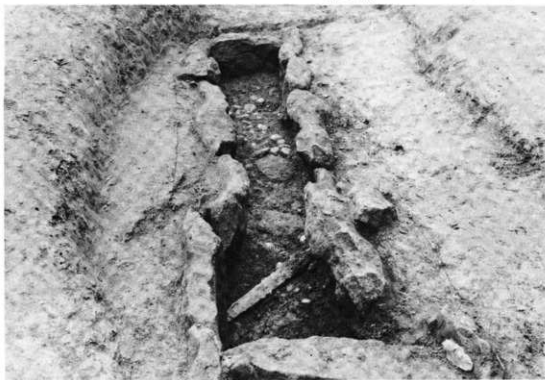
第1主体・箱式石棺蓋石



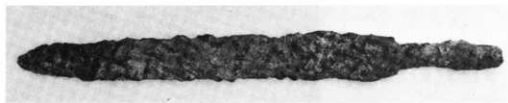
第1主体・箱式石棺内部



第2主体・箱式石棺蓋石（南から）



第2主体・箱式石棺内部（北から）



第2主体・箱式石棺出土の鉄剣

昭和57年3月25日

国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書

本片子遺跡・木原古墳

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市常盤町1-1